

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

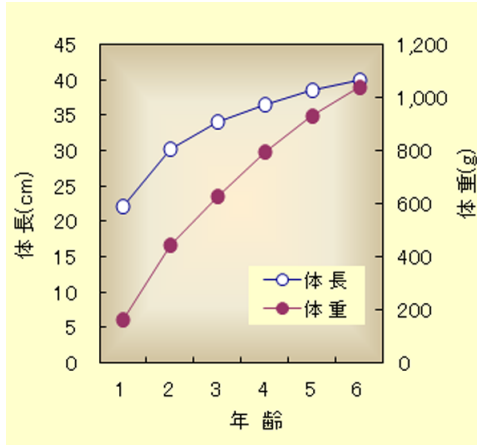
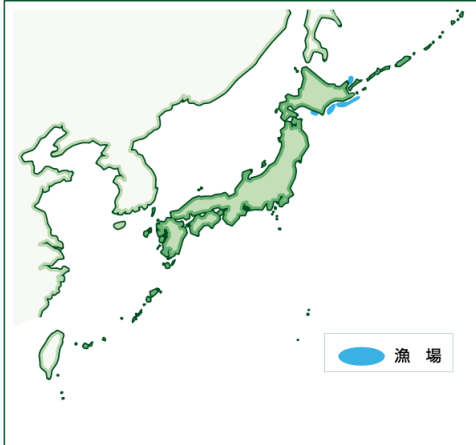
系群名 根室海峡・道東・日高・胆振

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳以上
成熟開始年齢: 1歳の終わり(一部)、2歳の終わり(大部分)
産卵期・産卵場: 日高沖や根室海峡、知床半島先端水域では10月中旬～11月中旬
索餌期・索餌場: 正確な索餌場は不明、漁場域は、襟裳以西、道東、根室海峡、北方四島周辺水域の水深200m以浅に形成
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は様々な種類の動物を捕食
捕食者: 不明

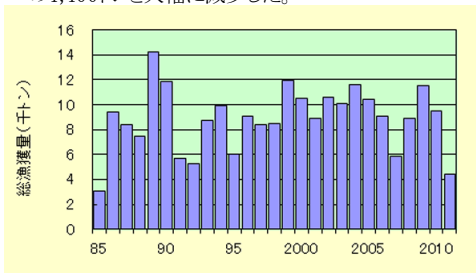


漁業の特徴

北海道根室海峡・道東・日高・胆振海域におけるホッケは刺し網、定置網、沖合底びき網漁業(沖底)などで漁獲され、総漁獲量の7～9割は沿岸漁業による。漁業種別は海域によって異なり、襟裳以西および道東では沖底および刺し網、北方四島では沖底、根室海峡では刺し網および定置網による漁獲が主体である。安全操業で国後島沿岸における漁獲も行われている。海域別漁獲量は根室海峡で最も多く、海域全体の5～8割を占めている。

漁獲の動向

漁獲量は、低い値から増加してまた戻るまで4～5年の間隔で増減をくり返している。1989年の14,000トンから1992年の5,300トンに大きく減少した後、2000年代半ばまでは変動しながら漸増傾向を示したが、1980年半ば以降、全体としては同程度の水準で変動している。近年では2009年に11,500トンまで増加したのち、2010年の9,500トン、2011年の4,400トンと大幅に減少した。



資源評価法

ホッケの漁獲は広範囲にわたって行われており、海域全体での漁獲量以外の資源量の指標(CPUE)などを得ることは難しい。さらに漁場は北方四島周辺水域および千島列島水域と接しており、これらの水域での情報が入手できないため、正確な資源評価が困難である。これらのため、近年の総漁獲量の変化から資源状態を判断し、根室海峡における羅臼漁協所属の定置網類および刺し網の一日一隻あたり漁獲量(CPUE)を参考とした。

資源状態

資源水準としては、過去27年間(1985～2011年)の漁獲量の平均値を50とした場合の相対値について、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2011年の漁獲量は4,435トンで25となり、低位と判断した。過去5年間の漁獲量は、2007～2009年に増加したが再び減少し、2011年は過去2番目に低い値となっている。根室海峡における定置網および刺し網のCPUEは、2011年に減少しており、変化の傾向は全体の漁獲量と同様である。2009年以降の漁獲量の減少は、当該海域の資源量が減少したことを反映していると考えられる。この減少傾向を重視して、資源動向を減少と判断した。



管理方策

漁獲量の推移から見るかぎり、当該海域の資源量は比較的安定して推移していたと考えられるが、2009年以降漁獲量は全ての海域で急激に減少している。2011年の漁獲量の減少は著しく、2010年級群の豊度が低い可能性もある。来遊状況が変化しただけでなく、加入量が減少している場合を想定し、漁獲率を増加させないことが重要である。平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $ABC_{limit} = \delta_2 \cdot Ct \cdot \gamma_2$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した。 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、 k は標準値の0.5、 b と l は直近3年の漁獲量の傾きと平均値である。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABC _{limit}	2.1千トン	$0.6 \cdot C_{2011} \cdot 0.79$	—	—
ABC _{target}	1.7千トン	$0.8 \cdot 0.6 \cdot C_{2011} \cdot 0.79$	—	—

- 算定されたABCには「安全操業」による漁獲を含まない

資源評価のまとめ

- 海域全体のCPUEを得ることが困難であるため、漁獲量の変化から資源評価を実施
- 過去27年間の漁獲量の推移から資源水準を、また過去5年間の漁獲量の変化から資源動向を判断し、低位、減少とした
- 根室海峡における定置・刺し網類のCPUEを動向判断の参考とした

管理方策のまとめ

- 資源量は比較的安定して推移していたと考えられるが、2009年以降全ての海域で漁獲量が急激に減少している
- 広域にわたり分布・回遊する種であることから、来遊状況によって漁獲量が変動すると考えられる
- 現行の漁獲努力量を増加させない取り組みが望まれる

執筆者: 森田晶子

資源評価は毎年更新されます。